

北海道一五〇年、各地に刻まれた パイオニアたちの志し

竹中 英 泰

昨夏、北見への帰省時に陸別町をドライブした。その折り、道の駅内にある「関寛齋資料館」に立ち寄って、関寛齋（一八三〇〜一九一三）を初めて知った。千葉生まれで佐倉順天堂に学び、長崎でポンペのもと蘭方医としての腕を磨き、徳島藩医となり、戊辰戦争では野戦病院で敵味方を問わず治療、その後山梨県立病院設立にも尽力するなど名医として声望は高かった。七二才の時、徳島を離れ陸別の開拓に乗り出す。四男の札幌農学校卒業を機に未開地開墾・農場経営を目指したのである。開拓は困難を極めるも、医師かつ開拓のパイオニアとして、陸別で八三才の生涯を閉じた。資料館は一九九三年の開設である。

松前町に顕彰碑のある中川五郎治（一七六八〜一八四八）の生涯も異彩を放つ。青森から松前へ渡り、択捉島の番人小頭の時に日露関係を揺るがす大事件に遭遇した。長崎での開国交渉が不調に終わって憤懣やるかたない露・レザノフの部下フヴォストフらによる番屋の襲撃により拉致され、シベリアでの抑留生活は五年余に及ぶ。この襲撃を機に幕府は蝦夷地警護を強化、シベリアへ向け航行中に薪水を求めて国後島に上陸したディアナ号・

ゴローニン船長を、幕府兵が捕縛し箱館に幽閉した。その時は引き返さざるを得なかったリコルド副船長は、翌年の引き渡し交渉に際し、抑留中の漂流民や五郎治を通訳として国後島に帯同、交渉は不成立に終わるも五郎治らは釈放された。その後、リコルドは国後島沖で高田屋嘉兵衛の船を拿捕した。翌年、抑留中にリコルドの信頼を得た嘉兵衛は交渉役として手腕を発揮し、ゴローニン船長の引き渡しに成功。その一方、江戸での取調べ後松前に戻された五郎治は、抑留時に手に入れた露語の牛痘種痘書により種痘法を習得していたことを活かし、一八二四年の天然痘大流行時、松前において一一歳の少女に牛痘種痘に成功した。ゴローニン事件では嘉兵衛の活躍に隠れていたが種痘のパイオニアだったのである。松前公園内の顕彰碑（一九九八年）には日本最初の種痘だった旨記載されている。

関場不二彦（一八六五〜一九三五）は会津の生まれ、東京帝国大学医学部卒業後、外科医局を経て、庁立札幌病院の副院長として渡道、四年後に開業した。関場医院は何度かの改称を経て現在は札幌北辰病院（地域医療支援病院）となっている。外科医として多くの

手術を手掛ける一方、北海道医師会を立ち上げ初代会長を務めた。内外の多数の医学書を収集し、「あいぬ医事談」などの著作がある。彼のコレクションは、二〇一二年に旭川医大に寄贈され、「関場・鮫島文庫」として教育・研究に供されている。

函館市名誉市民第一号の斉藤与一郎（一八七三〜一九六一）は新潟の生まれ。幼少時に函館の開業医の叔父の元に引き取られ、苦学し医師免許を取得、ドイツ留学等を経て、函館区医として発疹チフスの発見など伝染病対策で多大な実績を挙げた。徳望高い彼は、市民から熱望されて函館市長を務めるなど幅広く活躍、戦後は函館商科短大（現在の函館短大・函館大学）初代学長にも就いている。

高橋房次（一八八二〜一九六〇）は、栃木の生まれ。東京慈恵医学専門学校卒業後軍医等を務めるなか、医療に恵まれないアイヌの窮状に心を痛め渡道に至る。北海道庁立白老病院に院長として迎えられ、病院閉鎖後も開業医として生涯をアイヌの診療に捧げた。「コタンのシユバイツァー」、「アイヌの慈父」と慕われている。

北海道一五〇年、これらパイオニアたちに一貫するのはフロンティア・スピリットである。各地に残された彼らの高い志は、これからの一五〇年を生きる次世代にとって礎となるだろう。新たな世界を切り拓く力を引き出すこと

↑たけなか ひでやす・旭川大学名誉教授／旭川医科大学理事（非常勤）／旭川ウェルビーイング・コンソーシアム統括コーディネーター